



TITLE:

# 廣松渉の思想と実践(下): ソ連・東 欧崩壊後の動向をめぐる暫定的覚 書

AUTHOR(S):

渡辺, 恭彦

---

CITATION:

渡辺, 恭彦. 廣松渉の思想と実践(下): ソ連・東欧崩壊後の動向をめぐる暫定的覚書. 文明構造論: 京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集 2012, 8: 131-160

ISSUE DATE:

2012-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160415>

RIGHT:

## 廣松渉の思想と実践（下）

### —ソ連・東欧崩壊後の動向をめぐる暫定的覚書—

渡 辺 恭 彦

はじめに

1. マルクス共産主義・社会主義論の再解釈
2. 近代市民社会像イデオロギーの暴露
3. 国家社会主義への視角
4. 過渡期としてのプロレタリア独裁
5. 永続革命、世界革命へ

おわりに

#### はじめに

1991年、ソ連共産党の解体とソヴィエト連邦の崩壊により、資本主義体制とソ連・東欧体制の冷戦構造が終焉を迎えた。1980年代末に東欧から始まった民主化の嵐が20世紀の世界史的イベントであることは、衆目の一致するところと見てよいだろう。

この頃、廣松渉は、哲学体系の総決算と目される『存在と意味』第三巻の公刊を待ち望まれていたが、ソ連・東欧崩壊という状況を見るやその完成を先送りにした。それに代えて世に送り出したのは、マルクスが理論構築を行った時代からロシア革命、ソヴィエト政権成立までをたどった『マルクスと歴史の現実』（1990年）、廣松自身のマルクス研究を凝縮したと自負する『今こそマルクスを読み返す』（1990年）、『マルクスの根本意図は何であったか』（1994年）などのマルクス論、そしてソ連社会主義・共産主義を論じた諸論考であった。このような論考が、時務に応じたものであることは想像に難くない。

実際、この時期の廣松のソ連論は賛否両論を巻き起こしている。たとえば次のように、

1947 年生まれのマルクス主義政治学研究者<sup>1</sup>である加藤哲郎は、1991 年にオーストリア、ドイツで開催された学会報告で、廣松が掲げた新たなマルクス主義をいち早く肯定的にとっている。

哲学者廣松渉が、「帝国主義列強の包囲下で強行された本源的に無理なスターリン主義体制」「官僚的国家社会主義」の破産を宣告し、「今やあらためて真にマルクス主義的な世界革命が日程に上る」と勇ましく述べたのは、ある意味では、非スターリン主義オールド・ボリシェビキの知的誠実を示すものであった（『思想の言葉』『思想』1990 年 2 月）。<sup>2</sup>

その一方で、60 年代に学生運動を共にし、1969 年には全共闘運動をめぐる討論「＜討論＞個体の喪失から連帯へのめざめ」『日本の将来』（1969 年 8 月）でも廣松と同席している長崎浩は、次のように批判を浴びせている。長くなりすぎるが、関連する箇所を引用する。

もとよりここに「原則論」が登場して、マルクスの社会主義の理念は死んでいない、スターリン主義などによる歪曲からその金無垢を今こそ救い出すべしと主張するかもしれない。たとえば廣松の式辞みたいな文章から引いて見る。

---

<sup>1</sup> 加藤哲郎『東欧革命と社会主義』（花伝社、1990 年）、324 頁での自己規定による。

<sup>2</sup> 加藤哲郎『ソ連崩壊と社会主義 新しい世紀へ』（花伝社、1992 年）、165 頁。この箇所は元々1991 年 7 月 11 日～13 日の第 7 回オーストラリア日本研究学会（於オーストリア国立大学、キャンベラ）、同年 9 月 16 日～19 日の第 6 回ヨーロッパ日本研究学会（於ベルリン）の報告ペーパーとして英語で寄稿されたものである。英語では *The Japanese Perception of the 1989 Eastern European Revolution*, *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, Vol.23, No.1 (August 1991)、日本語では『季刊窓』8 号（1991 年夏）に、それぞれ発表されている。（前掲書、325 頁）なお、前者の英語版でも廣松の言葉が引かれ、次のように述べられている。「しかし、「東欧の反革命」を目撃したという実感を率直に表明した者は誰もいなかった。マルクス主義者の中には、私的な会合でこのことをささやいた者もいたかもしれないが、誰も公表はしなかった。／そのような状況の中、有名な反スターリン主義者であり、東京大学のマルクス主義哲学者である廣松渉が「帝国主義列強の包囲下で強行された本源的に無理なスターリン主義体制」「官僚的国家社会主義」の破産を勇ましく宣告し、「今やあらためて真にマルクス主義的な世界革命が日程に上る」と述べたのは、おそらくは知的に誠実であった。」*The Japanese Perception of the 1989 Eastern European Revolution*, *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, Vol.23, No.1 (August 1991), p9.

茲に、真正のマルクス主義者は、現状では少数派であろうとも、資本主義批判の存在論的意想を顕揚し、共産主義革命の原姿的理念を高く掲げ、それを弘布し、理想社会の実現を世界革命において成就すべく愈々奮励努力する所以となる。

資本主義の体制と理念を止揚し、エコロジカルな要件をも充足する相で、真正の自由・平等・博愛を現実化する未来社会像、すなわち、マルクスの提示した共産主義的理想社会像を具象的に彫琢すること、これがソ連・東欧の“改革”を正道に就かしめるためにも、喫緊の一大為であることを自覚する。

（「思想」1990年2月号）

しかし私は、資本主義の体制を止揚し、マルクスの理想社会像を彫琢するため「奮励努力する」とか、「自覚する」とか、そういうことは聞きたくない。私たちは三十年も、こういうことに「空騒ぎ」あるいは「奮励努力」してきたではないか。「理想社会の理念」はこの経緯のなかで枝分れしたりねじれたり、今日とのつながりを失ったりした。今、理念について彫琢したり奮励努力するとしたら、どんな形の理念であれひとが理念に捉われるというそのことについて、思考をくぐらせた果てでしかありえない。三十年間の空騒ぎの跡に理念をたぐり寄せるような思考は、どんなに抽象的であっても、畑ちがいの分野のものであっても、大学教授の専門の仕事であつたって、そんなことはかまわない。私たちはそこに理念の彫琢の跡を嗅ぎ分ける嗅覚くらいは身につけている。

ブルジョアジーでもプロレタリアートでもない「市民」の概念、「市民社会のなかでの階級的・民主主義的闘争」—これこそが、「大衆民主主義」が資本主義のもとでゆきわたり、現存社会主義のこれまでの政治体制が精算され、「市民社会」化しようとしている時、エスニシティやフェミニズムやエコロジーのラディカルな問題提起と挑戦を受けて、「人間の顔をした社会主義」を志す人々が、改めて考えなければならない、今日的問題である。この意味では、東欧革命を、「社会主義の再生」の方向で位置づけることができる。すなわち、「市民社会主義」である。……〔東欧の〕「フォーラムによる革命」は、「世界市民主義」にもとづく「地球市民」たちの「永続民主主義革命」の、現代的出発点とみなしうるのである。

結構なことであるが、これは大学教授の口から出まかせである。エコロジーの挑戦を受けたユーロ・コミニズムの末も、わが国ではこんな調子なのである。「人間の顔をした社会主義」を志す者の「今日の問題」などと、臆面もなくよくも言えるものである。廣松の言葉を墨で書いた式辞とすれば、これはふれあい市民広場のイベントの祝辞である。<sup>3</sup>

このように、長崎浩はなおも「理想社会の理念」を語ることに對して厳しい目を向けるが、それには1968年当時長崎自身がユートピアについて論じていたことが背景にあると思われる。当時長崎はこう述べていた。

ユートピアは近代の地平で自己を破壊し実現しようとする人間の行為のうちで構想され、かかるものとしてユートピアは叛乱の自己表現である。叛乱者は自己の疎外態を意識し、人間の分裂の総体を把握せずには自分を実現することができない。この把握こそ意識的なものとしてのユートピアの構想力である。この構想力は、つねに自己反省をともしう行為が産出するものであるために、たしかに空想のたわむれや狂気の発作なのではない。しかしだからといって、ユートピアの構想は未来の設計図や綱領のプログラムといった次元でなされるのではない。だから、ユートピアを「空想的」「非合理的」といって非難するのは馬鹿げている。ユートピアは、叛乱者がかかえこんでいる弁証法の受苦から生まれでる叛乱者の呻吟なのだ。<sup>4</sup>

「自己を破壊」することや「自己反省」をもとにして立てられるユートピアは、未来像といった次元のものではなく、近代に生きる人間、すなわち「叛乱者の呻吟」であるという。こうした長崎の見方は、1970年前後の廣松の主張と通ずるものであった。1970年前

---

<sup>3</sup> 長崎浩『世紀末の社会主義 変革の底流を読む』（筑摩書房、1990年）36～37頁。引かれている廣松の文章は「思想の言葉 東欧・ソ連の“変動”に思う」『思想』（岩波書店、1990年）と題された短文である。

<sup>4</sup> 長崎浩『叛乱論』（合同出版、1969年）、48頁。なお、「叛乱論」の初出は、『情況』1968年11月号。

後に新左翼運動の理論家として学生運動を支持した廣松は、「自己否定」を契機とした社会変革を唱えていた。<sup>5</sup> しかし、それは特定のユートピア像を積極的に掲げてのものではなく、その後も廣松は自身の社会構想を公にはしていない。つまり、ソ連崩壊を受けて出された廣松の言説は、理念や理想社会について述べることに對する 20 年ほどの禁欲を経たあとのものであった。

1992 年には、こうした社会体制の変動を振り返り、廣松は次のように述べている。

筆者は、ソ連の置かれてきた国際的・国内的な歴史的悪条件を顧慮しつつも、マルクス主義的共産主義者を自任する者であればこそ、スターリン時代このかたのポリシェヴィキの施策ならびにそれを追認するかたちに仕立て上げられた所謂“マルクス・レーニズム”思想体系を殊更に厳しく批判し、マルクス主義の原姿の思想・理論の復辟と継承的展開に半生を賭して来た。加之、既成社会主義諸国での下からの再革命を実践的課題の一半とする新左翼運動にコミットして来た。が、国家社会主義の既成体制が斯くも脆弱にして昨今見る如き自己崩壊を遂げることは予想していなかった。今や現実となったこの変動をも与件として世界革命の綱領と組織が再編されねばならない。<sup>6</sup>

ここで「国家社会主義の既成体制が斯くも脆弱にして昨今見る如き自己崩壊を遂げることは予想していなかった」と述べてはいるものの、廣松はソ連社会主義社会を看過してきたわけではなかった。1970 年に著した『現代革命論への模索 新左翼革命論の構築のために』では、すでにソ連を「変畸せる社会主義」とであると規定し、「自己崩壊を遂げる」とはいえぬまでも、「生産力の発展による自動的な正常化」は不可能であると断じている。そしてその責は世界プロレタリアートの前衛にもあるとし、社会主義諸国内部での下からの革命の必然性を説いている。

ソ連社会の変畸は、為政者の個人的資質といったものに窮局的な原因が存在するも

---

<sup>5</sup> 詳しくは拙稿「廣松渉の革命主体論—物象化論への途—」『文明構造論』7 号（京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野、2011 年）、21～43 頁を参照。

<sup>6</sup> 廣松渉「社会体制の変動と哲学—現代の歴史的位境—」『哲学雑誌』（哲学会、1992 年）、119 頁。

のではないこと、これはあらためて記すまでもない。生産力水準が低く、社会的生産ファンドの蓄積に乏しい後進国における革命が、先進国革命との結合が成就されないという条件のもとで、歴大な軍事的負担に耐えつつ蓄積を強行すべく余儀なくされる場合には、つまりソ連が余儀なくされた「一国社会主義建設」のもとにおいては、しかるべくして変畸を生ずる。〔中略〕

この点に鑑みると、ソ連社会の変畸は、強行的な一国社会主義建設を余儀なくさせた世界プロレタリアート、なかんずくその前衛の共同責任であり、単に非難してすむ問題ではない。とはいえ、現実の問題として、ソ連社会はもはや生産力の発展によって自動的に正常化するという期待を許さぬほど変畸の度を強めており、先進国革命との結合によってすら、もはや直接的・無媒介的には正常化が困難であるように思われる。「社会主義諸国」少なくともその若干においては、帝国主義列強内における革命の成功を俟って、下からの革命的な変革が必要とされるであろう。<sup>7</sup>

もっとも、廣松は、1946年に「青年共産同盟」に加盟した当時は、「ソ連社会主義のバラ色の未来を信じて疑わなかった」<sup>8</sup>のに対して、後年にはその考えが変わり、一貫してスターリン主義体制を批判的にみている。<sup>9</sup>たとえば同じ文章でこう述べている。

私は、1964年このかた、ソ連や東欧などを「変畸せる社会主義国」と規定し、官僚的支配層を打倒する「下からの革命的変革なくしてはもはや社会主義の正道に復し得ぬほどにまで変質している」旨を折々に書いてきたが、括弧付きの「社会主義諸国」の現体制を正確な社会科学的概念でどう規定すべきか、いまだに成案を得るに至って

<sup>7</sup> 廣松渉『現代革命論への模索 新左翼革命論の構築のために』（盛田書店、1970年）、192～193頁。

<sup>8</sup> 廣松渉「人類史的壮挙への長い道」『エコノミスト』（毎日新聞社、1990年）、58頁。廣松が生まれたのは1933年である。

<sup>9</sup> 1979年には、スターリン哲学には「弁証法的唯物論」理解に誤りがあるとして、スターリンの著作『弁証法的唯物論と史的唯物論』とマルクス・エンゲルスの著作とを比較対照しながら論じている。「彼が唯物論の「公約数」的な条項を以って直ちにマルクス主義的唯物論の「特徴」としているのは、彼の採る「唯物論」が通俗的なそれ、マルクス主義以前のそれの域を出ていないことの一証左だと申さざるを得ません。」廣松渉「スターリン哲学批判のための視角—『弁証法的唯物論と史的唯物論』に即して—」『別冊ソ連問題』14号（ソ連問題調査センター、1979年12月）、80頁。

さらに、「社会主義諸国」の規定が困難であることに加え、ソ連の崩壊は「原理的に言えば、そもそも世界革命から孤立された形で進められた「一国社会主義建設」の本質的な無理に淵源する」<sup>11</sup>と廣松は断じている。

マルクス主義哲学者として自己規定していた廣松が、その後 1980 年代に発表する論稿は、多くが哲学的なものであった。この時期廣松は、時評的な発言・論稿を発表してはいるが、おそらくは主著『存在と意味』の完成に心血を注いでいた。こうした執筆状況において、1990 年前後に矢継ぎ早にマルクス論・社会主義論を発表したのは、マルクス主義の実験場と見られたソ連の崩壊からマルクス主義の形勢が不利になったことを危惧してのことと思われる。<sup>12</sup> 廣松は、こうした状況をマルクス主義の単なる破綻ではなく、「第二段階のマルクス主義運動」が終焉し、段階が移り変わったものとみている。

今や、この意味での「第二段階のマルクス主義運動」が終焉期を迎えているのである。ベルリンの壁の崩壊は、暫にスターリン主義体制の破綻を象徴するのみならず、このことをも表意し、以って、マルクス主義運動が近未来において「第三段階」を画するであろうことを予兆するものである。<sup>13</sup>

---

<sup>10</sup> 廣松渉「人類史的壮挙への長い道」『エコノミスト』（毎日新聞社、1990 年）、59 頁。

<sup>11</sup> 廣松渉『東欧激変と社会主義』（実践社、1994 年）、53 頁。

<sup>12</sup> 廣松の場合は党派的な意識が強いが、マルクスの理論とソ連を短絡的に結びつける趨勢に対しては、別の立場からも批判がある。「第三草稿」において、共産主義は自己疎外の止揚—超越、抑制—を意味することになるだろう。「共産主義」という語は、後にそれが持つようになる特別な政治的および組織的な意味をまだ持っていない。この点で、その語は曖昧な仕方でも、もっぱら矛盾が消え去る歴史の段階のみを指している。したがって、ここで言われている共産主義がソヴィエト連邦といったものを表わしていると述べることはできない。こうした区別は、一般にマルクスに対するわれわれの関係にとって重要である。われわれのマルクスに対する関係が中立的であるべきだということではなく、フロイトやニーチェといった他の思想家たちに対する関係と同じように非政治的でなければならないということである。」ポール・リクール、ジョージ・H・テイラー編『イデオロギーとユートピア 社会的想像力をめぐる講義』（川崎惣一訳、新曜社、2011 年）、112 頁、傍点引用者。

<sup>13</sup> 廣松渉「“壁”崩壊後の歴史的課題情況」『情況』（情況出版、1990 年 7 月）、14 頁。



周囲からの要請を受けてとはいえ、想定していなかったソ連・東欧の崩壊という外的な要因によって未来社会像について改めて論じたとするなら、そこに廣松の理論と社会観との連関を探ることも可能だろう。たとえば『廣松渉コレクション第二巻 社会主義の根本理念』の編集・解説を行っている政治学者星野智は、廣松がそれまでフランス革命の三つの原理、すなわち自由・平等・友愛という原理を社会主義論の祖上には載せていなかったにもかかわらず、あえてそれを祖上にあげたのは、旧ソ連・東欧の崩壊という事実によって廣松自身がマルクスの未来社会論に関する議論の必要性を痛感したことを示しているという。<sup>14</sup> そこで本稿では、ソ連・東欧崩壊を目の当たりにして廣松が展開したマルクス論を紐解き、廣松自身の未来社会像を浮き彫りにすることを目的とする。

## 1. マルクス共産主義・社会主義論の再解釈

マルクスの理論を社会主義理論として援用し、それを現実へ適用した姿をソ連に求める見方に、廣松は否を唱える。むしろ資本主義とソ連・東欧はともに畸形的な形態であり、双方が収斂しつつあるという。

ここでは、具体的な事情や経過の分析に立入る余裕がありませんけれど、歴史的な帰結として、ソ連や東欧の社会は社会主義の本来的理念からすれば反対物と言ってもよいほど歪んだ社会体制をうみだしてしまいました。

先に申しましたように、資本主義の側も元来の資本主義の理念からすれば変貌した存在形態になっており、ソ連や東欧の諸国の側も変畸しておりますため、両体制の間にいわゆる「収斂」現象が見られるようになってきておりました。〔中略〕ともあれ、しかし、いわゆる戦後体制がここ三分の一世紀を通じて漸次的に構造的変動のベクトルを辿ってまいりましたところ、近年、その変動が急激に加速化される局面に至りました。

最初あたりで申した通り、東欧・ソ連の激変は、この構造的変動の一環なのであります。<sup>15</sup>

---

<sup>14</sup> 星野智「国家社会主義と「生態学的」社会主義 廣松渉の社会主義論をめぐって」『情況』（情況出版、1994年11月）、115頁。

<sup>15</sup> 廣松渉『東欧激変と社会主義』（実践社、1994年）、23頁。

「国家社会主義」諸国も資本主義化しており、両体制は収斂していくと廣松は見ている。このように、一国だけではなく、世界的な連関で構造変動を捉える見方は廣松に限られるわけではない。たとえば、宇野弘蔵のもとで学び、宇野理論の流れをくむ経済学者岩田弘がいる。岩田と廣松は、学統は異なるものの、1974年の同時期に『国家論研究』（論創社）への執筆歴がある。岩田も基本的には、世界的なシステムである資本主義的商品経済関係をトータルに廃棄することなしには、社会主義を実現することはできないという立場にたっている。<sup>16</sup>

1991年、要請を受けて催されたと推測される公開討論会の冒頭で、廣松は次のように述べている。

社会主義理論の新構築という大層なテーマになっておりますが、本日は一般公開の討論会でもありますので、成案を提示する流儀においてではなく、問題を提起して一緒に考える機縁を供するという形で発題させていただきます。〔中略〕

さて、本日のタイトルは「社会主義の……」となっておりますけれども、実は私自身は社会主義という言葉を使うのは嫌いなのです。そういうことまで、マルクスに義理立てする必要はないのかもしれませんが、マルクスは私の知るかぎり、自分自身を社会主義者というふうに規定したことはありません。〔中略〕私としては「社会主義理論の再構築」というような、社会主義という言葉を本当は使いたくない。<sup>17</sup>

---

<sup>16</sup> 岩田弘『現代社会主義と世界資本主義—共同体・国家・資本主義』（批評社、2006年）、75頁。「現実的には、資本主義は、自己完結的な一国的システムではなく、すぐれて世界的システムなのであり、それが資本主義の大工業を基軸とする商品経済関係を通じて組織している分業関係は、同質的な社会的生産体の内部的な分業関係ではなく、異質な種々雑多な社会的生産体を外的に結合する世界市場的な分業関係なのであって、こうした世界市場的分業関係を解体再編成し、これを人類の目的意識の共同性に置き換えることなしには、資本主義的商品経済関係をトータルに廃棄することはできないのであり、したがってまた社会主義をトータルに実現することはできないのである。」初版の刊行は1989年であり、その際の目的を次のように述べている。「本書の主内容は、ソ連・東欧社会主義の実体が国家管理資本主義であり、その破綻が切迫していることを明らかにすることにあつた。そしてこれに対するロシアマルクス主義の責任を問うものであつた。」（前掲書、6頁）

<sup>17</sup> 廣松渉「社会主義理論の新たな構築へ」『月刊フォーラム』（フォーラム90s、1991年）、4～5頁。この論文の題は、おそらく廣松がつけたものではない。明記されていないが、講演の主権者側が設定した題目が「社会主義理論の再構築」であつたものと思われる。

こうした廣松の言葉からは、マルクスと社会主義とを短絡的に結びつけることに対して明確に否定的な立場を採っているということが伺える。ソ連・東欧の失墜とマルクスの理論とを相即的に結びつけるのではなく、一度同時代的な文脈から切り離してマルクスの論を分析する方法を廣松は採っている。実際、マルクスを改めて論じた小著『今こそマルクスを読み返す』（1990年）の冒頭では、マルクスを論じる理由について、学界レヴェルでの読み返しが進んでいることに加えてこう述べている。

「マルクスの思想・理論は破綻した」という“認定”が昨今のソ連・東欧の“再資本主義化”の動向を機縁にして、いよいよ弘まりつつある現況を私は強く意識しております〔中略〕マルクスの思想を復元するだけでなく、彼の暗示してみせた新しい理論的地平、新しいパラダイムを継承的に展開・充当して行くことこそ真の課題です。<sup>18</sup>

マルクスの思想・理論が歪んだものになっているという事実を鑑み、ソ連・東欧崩壊を機にマルクスの再解釈を廣松は課題としている。

したがって、本稿ではまず、マルクスの社会主義論を廣松の考察につき従いながら追っていくことから始めたい。廣松は、『マルクスと歴史の現実』（1990年）のなかで、こう述べている。

今日では、私どもは社会主義という言葉と共産主義という言葉をごっちゃに使う傾向がありますが、マルクスは自分の立場としては共産主義という言葉しか使いません。マルクスも、社会主義という言葉に批判の対象として使うことはもちろんあります。唯一ポジティブに言っているのが初期の『経哲手稿』のなかで、社会主義としての社会主義という議論の出てる個所です。概念規定は全然ないんですけど、とにかく、『経哲手稿』には、社会主義という言葉がポジティブな意味で使われている、私の知る限り唯一の例があります。<sup>19</sup>

社会主義や共産主義といった言葉が独り歩きするなか、廣松は文献学的にあくまでマル

---

<sup>18</sup> 廣松渉『今こそマルクスを読み返す』（講談社現代新書、1990年）、6頁。

<sup>19</sup> 廣松渉『マルクスと歴史の現実』（平凡社、1990年）、96頁。

クスの言葉に根拠を求めようとしている。そしてその上で、マルクスがとるのは、社会主義ではなく共産主義であると述べる。それでは、マルクスが思い描いた共産主義社会とはどのようなものであったのだろうか。それは、1875年に、ゴータでラッサール派とアイゼナハ派が合同して作った『ゴータ綱領』に対してマルクスが向けた批判、通称『ゴータ綱領批判』<sup>20</sup> において述べられている。

ここで問題にしているのは、それ自身の基礎のうえに発展した共産主義社会ではなくて、反対に、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがってこの共産主義社会は、あらゆる点で経済的にも道徳的にも精神的にも、それが生まれてきた母胎である旧い社会の母斑をまだ身につけている。〔中略〕 こうして、同じ労働を負担し、したがって社会的消費基金に同じ持ち分をもつばあいでも、ある者は他の者より事実上多く受けとり、ある者は他の者より富んでいる等々ということが生ずる。これらすべての欠陥を避けるためには、権利は平等であるよりも、むしろ不平等でなければならないだろう。

しかしこのような欠陥は、長い生みの苦しみののち資本主義社会から生まれたばかりの、共産主義社会の第一段階では避けられないものである。権利は、社会の経済的な形態とそれによって制約される文化の発展よりも高度であることは決してできない。

共産主義社会のより高度の段階において、すなわち諸個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神的労働と肉体的労働との対立もなくなったのち、また、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、生活にとってまっさきに必要なこととなったのち、また諸個人の全面的な発展につれてかれらの生産諸力も成長し、協同組合的な富がそのすべての泉から溢れるばかりに湧きでるようになったのち—そのとき、はじめて、ブルジョア的権利の狭い地平は完全に踏みこえられ、そして社会はその旗にこう書くことができる。各人はその能力に応じて、各人はその必要に応じて！<sup>21</sup>

---

<sup>20</sup> マルクス自身は『ドイツ労働者党綱領評注』と題し、予定されていた合同ドイツ社会民主労働者党の綱領草案に批判的に検討を加えたもの。廣松渉・片岡啓治編・解説『マルクス・エンゲルスの革命論』（紀伊国屋書店、1982年）、327頁参照。

<sup>21</sup> マルクス『ゴータ綱領批判』（望月清司訳 岩波文庫、1975年）、35～39頁。

ここでマルクスは、共産主義社会を二段階に分けて設定している。低次のものとして、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会があり、高次の共産主義社会においては、個人が分業に隷属することがなくなるという。廣松によれば、高次の共産主義社会は、1840年代以来のマルクスの文献において表象されてきたものと重なるという。たとえば、1844年に著した『経済学哲学手稿』で、人間疎外論的な発想から人類史を描いたさいに掲げた共産主義も、ここでの高次の段階と重なることになるだろう。共産主義社会についてのマルクスの見方のこうした変遷を「経済学の研究が進み、理想的な共産主義社会を実現するためには前段階での条件整備が必要なことの自覚が深まった結果」<sup>22</sup> であると廣松はみている。しかし、この高次の共産主義社会ですらも、具体的な像を表しているわけではない。その背景には、マルクスの一貫した態度がある。『ドイツ・イデオロギー』(1845～46年)でマルクスは、共産主義は「現在の状態を止揚する現実的な運動」であるとし、エンゲルスも『ドイツ・イデオロギー』の時点以後、終生「固定的な分業のない社会」ということで理想的未来社会像を思い描いていたという。<sup>23</sup> このことについて廣松は次のように述べている。

マルクスおよびエンゲルスは、いわゆる空想的社会主義者たちとは違って、未来社会の詳細な見取図は描かない態度で一貫しております。われわれ人間のイマジネーションというか構想力は、歴史的未來に対してあまりにも射程が短すぎるということを彼らは理解しておりました。私どもは共産主義革命の、言うなれば存在論的な意義を自覚化しうれば足るのであって、共産主義社会の未来像そのものをくわしく訪ねる必要はないと思います。<sup>24</sup>

このように、廣松は共産主義社会の未来像を積極的に立てることよりも、その存在論的

---

<sup>22</sup> 廣松前掲書、102頁。

<sup>23</sup> 柄谷行人は運動としての共産主義を「終り（目的）」なき闘争と称している。「マルクスがいったように、「共産主義」とは「現実の諸条件」がもたらす「現状を止揚する現実の運動」としてしか無いとするならば、さらに「共産主義」とは「個と類」という回路のなかに閉じこめられた思考に対する否定にあり、すなわち類（共同体）に属さないような個の単独性と社会性にあるとするならば、それもまた「終り（目的）」なき闘争としてしか無い。」「歴史の終焉について」『終焉をめぐる』(講談社学術文庫、1995年)、202頁。

<sup>24</sup> 廣松前掲書、102～103頁。

条件を明らかにすることを重くみる。

他方で、マルクスが具体的な未来社会を描かないことを貧弱なユートピアにとどまっているとみる批判もある。たとえば、学生時代から廣松と接点のあるロシア・ソ連史研究者である和田春樹は、マルクス及びマルクス主義の弱みについてこう述べる。

マルクス主義は社会主義を革命によって実現すべき目標として提示した。しかし、マルクスは社会主義社会についてのユートピアにはいかなる具体性も、イメージも与えなかった。むしろそうすることを峻拒したのである。〔中略〕それにしてもマルクスがユートピアの難題を単純な楽観論ですりぬけている印象は否めない。その意味で言えば、マルクス主義はユートピア思想としては、むしろ後退を現していると言わざるを得ない。<sup>25</sup>

こうした和田の主張を踏まえて行われた対談で、廣松は具体的な未来像を描かない点にマルクスの葛藤を読み取っている。

私としてはマルクスが中央計画経済ということを全然言わないのは、彼のエタティズム〔国家社会主義〕批判と関係するように思いますし、ブルードンのことともつながるんです。国家が計画経済をやるのはとんでもない、というのがブルードン派なんですね。マルクスはブルードンをほとんど天敵のようにしてずっと批判し続けてきたんですけれども、資本論を書き、色々と考えが煮つまった後では未来社会のことを言おうとすると、ブルードンがある時期から言っていたことと非常に近くなってしまう。そういう事情もあって自分の意見をあまり言えなかった。そこが和田さんの言われる貧弱なユートピアのひとつの理由ではないかと思いますけれどね。<sup>26</sup>

---

<sup>25</sup> 和田春樹『歴史としての社会主義』（岩波新書、1992年）、44～51頁。

<sup>26</sup> 和田春樹・廣松渉「ロシア革命以降の世界とマルクス主義—国家社会主義の終焉」『情況』（情況出版、1993年8・9月）、12頁。なお、この時の対談を和田は次のように回想している。「職員組合と助手会は、学生中央委員会代表と全院協代表をよんで、六団体の参加する一月全東大集会〔1963年1月31日〕のための実行委員会を発足させた。中央委員会の代表は今井澄君、最首悟君、東院協の代表は人文系の廣松渉氏ら、助手連絡会議の代表は私であった。この時が廣松氏ともっとも接近した時であった。氏は晩年私のマルクス論を認めてくれ、ガンで入院中の病院から出てきて対話してくれた。」和田春樹『ある戦後精神の形成 1938-1965』（岩波書店、2006年）、323頁。

これらの文章からは、ある種の共産主義社会の未来像を掲げて、そこからさかのぼって現状を批判するという態度ではなく、モメントとして共産主義革命を捉え、その可能性の条件を自覚化することを説く廣松の解釈がみてとれる。問題となるのは、こうしたマルクス解釈を踏まえた廣松がどのような未来社会像を掲げているかである。

次節では、共産主義社会の母胎であり、批判の対象である資本主義についての廣松の分析を見ていく。

## 2. 近代的市民社会像イデオロギーの暴露

マルクスは『ゴータ綱領批判』で、高次の共産主義社会においては、諸個人が分業に隷属することがなくなり、能力に応じてはたらき、必要に応じてはたらくことになる述べた。それでは、個人の自由を謳った近代市民社会をマルクスはどのようにみていたのだろうか。『資本論』でマルクスは、近代市民社会の自由・平等・友愛イデオロギーを「自由・平等・所有・ベンサム！」と揶揄的に述べている。それは次のような具合である。

労働力の売買が、その限界のなかで行なわれる流通または商品交換の部面は、じつさい、天賦の人権のほんとうの樂園だった。ここで支配しているのは、ただ、自由、平等、所有、そしてベンサムである。自由！なぜならば、ある一つの商品たとえば労働力の買い手も売り手も、ただ彼らの自由な意志によって規定されているだけだから。彼らは、自由な、法的に対等な人として契約する。契約は、彼らの意志がそれにおいて一つの共通な法的表現を与えられる最終結果である。平等！なぜならば、彼らは、ただ商品保持者として互いに関係し合い、等価物と等価物とを交換するのだから。所有！なぜならば、どちらもただ自分のものを処分するだけだから。ベンサム！なぜならば、両者のどちらにとっても、かかわるところはただ自分のことだけだから。<sup>27</sup>

このように、近代市民社会の自由・平等イデオロギーについて、マルクスは冷淡な態度をとっている。資本主義社会においては二種類の違った商品所有者がいる。すなわち生産手段を所有する資本家と「労働力商品」を売る労働者である。労働者は自らの労働力を自

---

<sup>27</sup> マルクス『資本論』第1分冊（岡崎次郎 訳、大月書店、1972年）、308～309頁。

由に売ることができるとされる。しかし実際には、労働者は労働力を再生産するために必要な生活必需品を買い戻す分を得るのみであって、それを超える剰余価値は資本家に搾取されている。ここで資本家は「指揮・監督する者」として、労働者は「指揮・監督される者」として労働過程に入るとはいえ、さしあたってはあくまで労働力という特殊な商品の売買、受け渡しの現実化なのであって、人格的支配・隷属の関係ではない。

マルクスは「労働者はただ意識のある器官として自動装置の意識のない器官と並列させられ、この器官といっしょに中心的動力に従属させられているだけである」<sup>28</sup> と述べている。このように、労働者は自由な意識をもった労働主体であるとはいえ、実際は資本のメカニズムの中の歯車のような装置になっているのである。このことをマルクスは「実質的包摂」と呼んでいる。こうした労働者の状態を外在的に捉えた場合、器官や部品として機構に実質的に組み込まれているとみなせるのである。このことを廣松は次のように概括する。

こうして、近代資本主義的産業の作業現場における労働者の包摂は、外部的観察の描像で記述するとき、全体的な作業機構の“器官”や“部品”に擬られることのできるような相での実質的包摂を現成せしめております。<sup>29</sup>

つまり、近代市民社会における自由・平等とは、賃労働者といえども資本家と対等な人格とみなされ労働力商品を資本家に売るという構造のイデオロギー表現であると、マルクスは喝破したのであった。

廣松はこうしたマルクスの洞察を次のように要言している。

マルクスが『資本論』において開示したかった重要な意想の一つは、こういう“近代

---

<sup>28</sup> マルクス『資本論』第2分冊（岡崎次郎 訳、大月書店、1972年）、326頁。このように工場生産において人間と機械を区別して捉える見方を、独自の概念で斬新に再解釈したのがドゥルーズとガタリである。ドゥルーズとガタリは、「人間と道具は、考慮される社会の充実身体の上において、すでに機械の部品である」と述べ、充実身体と人間と道具の集合を欲望機械として定義する。『アンチ・オイディプス 資本主義と分裂症（下）』（河出文庫、2006年）、340～341頁。

<sup>29</sup> 廣松渉『今こそマルクスを読み返す』（講談社現代新書、1990年）、129頁。



的市民社会像”のイデオロギー的・自己欺瞞性を、資本制社会の構造を実態分析してみせることで、完膚なきまでに暴露することになりました。それも、単に暴露・告発するのではなく、また、単に実現さるべき理想的社会編制を対置・構想するのではなく、資本制社会の現構造が、その物象化された進展の赴くところ、いかなる構造的再編を余儀なくされつつあるか、いかなる社会体制の可能的条件を生み出しているか、これを見定めるのがマルクスの意想でした。<sup>30</sup>

先にも述べたように、廣松の解釈によれば、マルクスは具体的な理想社会を立てて近代市民社会像を批判するわけではない。そうではなく、自由・平等・友愛といったことがことさらな要求にならなくても済むような状態こそが実現されなければならないとマルクスは考えているのである。それゆえ、マルクスは資本主義社会の構造分析に徹している。

廣松は、こうした近代市民社会をただ批判するだけではなく、近代世界が展開することによって別の社会編制を構築する条件が形成されたとみている。

だが、近代世界はその展開を通じて、人々が自営業者とは別の存在形態で「奴隷制」から解放された新しい地歩に立ちうる条件、近代的資本主義とは別様の社会編制を構築する現実的諸条件をも歴史的に形成した。<sup>31</sup>

### 3. 国家社会主義への視角

1993年、廣松は和田春樹との国家社会主義をめぐる対談で、「ソ連社会について国家社会主義と規定するのはそうポピュラーではなかった」<sup>32</sup>とし、国家社会主義の用語の確認から始めている。和田は80年代の前半から、国家主義的な社会主義というニュアンスで「第一次大戦中のドイツ人の「国家社会主義」と関連させるようになった」<sup>33</sup>と述べている。それに対して廣松は、「私の場合は晩年のエンゲルスやエルフルト綱領での用語がヒント」であったとし、「少し遅いのですがやはり国家社会主義（シュターツゾチアリズム

---

<sup>30</sup> 廣松前掲書、80頁。

<sup>31</sup> 廣松渉『近代世界を剥ぐ』（平凡社、1993年）、293頁。

<sup>32</sup> 和田春樹・廣松渉「ロシア革命以降の世界とマルクス主義—国家社会主義の終焉」『情況』（情況出版、1993年8・9月）、6頁。

<sup>33</sup> 同上、7頁。

ス)ということばを使うようになった」という。<sup>34</sup> たとえば次のような箇所を見れば、廣松の規定がよく分かる。

ラッサールみたいにビスマルクと結んで、いってみれば国営化みたいなことをやらせたいと志向する者もありました。あるいは、国営化とは全然違うんですけども、やはり社会という大きな資本家に諸個人が賃労働者としてかかわらざるをえないようなプランがプルドンによって出されていました。社会とか国家とかが資本所有者であって、それに個々の労働者が賃労働者としてかかわるという形態にある限り、そんなものは所詮は賃金奴隷制なんだとマルクスは言います。晩年のエンゲルスが参与した『エルフルト綱領』のなかでは「シターツゾツィアリスムス」、国家社会主義という—シターツカピタリスムス、国家資本主義ではなくて—全資本が国有化されているような社会は、シターツゾツィアリスムスといえるかもしれないけれども、我が党はそういうものと共有するものはないという言い方をしているということも、この際テイク・ノートしておきたいと思います。これはスターリン主義みたいなものを考えると、マルクス・エンゲルスの道具立てがどうであったかということを見るうえでの、一つの手がかりになると思います。<sup>35</sup>

『エルフルト綱領』において、エンゲルスは国家社会主義を志向していない。この事実をもとに、廣松はスターリン主義との対質を試みようとしている。ここで、国家社会主義は国家資本主義とは区別されている。また次のように、その後も国家社会主義をエンゲルスの線に沿って用いており、国民資本主義（ナチオナルゾチアリスムス）とも区別されている。

EC 諸国では社会民主主義の政権が主導する方向に向かっており、北欧や東欧を巻き込んだ統合 EC が、「国家社会主義」（シュターツゾチアリスムスであって、ナチオナルゾチアリスムスではありません）の方向に進む公算が大きいと思われます。晩年のエンゲルスが厳しく批判しているように、これは名ばかりの“社会主義”にすぎない

<sup>34</sup> 同上、7 頁。

<sup>35</sup> 廣松渉『マルクスと歴史の現実』（平凡社、1990 年）、69～70 頁。

代物ですが、これがあの「収斂」を促進する結果になるものと予測されます。<sup>36</sup>

先に述べたように、原理的に資本主義を批判する場合、資本―賃労働関係の問題を扱うことは避けられない。そこから、マルクスの国家社会主義に対する批判も出てくる。

それから国家社会主義に対するマルクス・エンゲルスの批判もご承知のとおりです。国家社会主義ということで生産手段を国有にしてしまったとしても、そこでの労働者と国家との関係が賃労働―資本関係と同じであれば、これはやはり一種の奴隷制であるから国家社会主義ではダメなんだ。私有財産制を廃止して全生産手段を国有化しただけではダメである、というのがマルクスの若いときからの一貫した主張なんですね。最初に申した社会主義に対するマルクスのアレルギーもこのことと深く関係しております。<sup>37</sup>

国家社会主義では、国家と労働者の関係が結局は資本―賃労働関係になってしまい、奴隷制にとどまっている。つまり、私有財産制を否定し全生産手段を国有化しても奴隷制の域を出ない。それでは、私有財産制を廃止して、国家資本主義や国家社会主義に陥ることなく資本主義を真に止揚するには、一体どうしたらよいのだろうか。廣松は、上部構造の再編を政治革命、下部構造である生産関係の再編を社会革命とし、資本主義国家を成立させたのがブルジョア革命、共産主義社会を成立させるのがプロレタリア革命であるとする。廣松によれば、マルクスは、国家を廃絶するためにも、生産関係そのものを変革する社会革命こそが要件であることを説き、その可能性と歴史的条件を分析している。いわく、資本主義国家を成立せしめた「ブルジョア革命」は上部の“重し”を除去し、新しい政治機構で置き換えるものであり、政治革命は社会革命を追認するものであった。

それでは、資本主義社会の次段階である共産主義社会を成立させる「プロレタリア革命」はどのようなものだろうか。廣松は次のように述べている。

共産主義社会を形成するためには、まず政治革命で国家権力を握り、プロレタリアー

<sup>36</sup> 廣松渉『東欧激変と社会主義』（実践社、1994年）、25頁、傍点引用者。

<sup>37</sup> 廣松渉「社会主義理論の新たな構築へ」『月刊フォーラム』（フォーラム 90s、1991年）、15～16頁。

ト独裁という過渡期を通じて、下部構造を変える社会革命を推進し、以って旧体制の復活、旧国家権力の復興の根を絶つことが必要です。そのようにして、階級的分裂が存在しない状態、つまり、階級国家が必然的に形成されなくなる状態、これの実現を持ってようやく国家の廃絶が可能化・現実化する次序となります。〔中略〕そこで、やむをえず、当初には比較的少数の自覚的・指導的分子が独裁的体制で反革命分子を抑圧しつつ、広汎なプロレタリア大衆が新支配者たるにふさわしく成長するのを促進しながら待つこと、これを余儀なくされる次第です。この独裁期を乗り切ることができなければ、旧体制が復活して元の本阿彌にもどってしまうことでしょう。ですから、是が非でも、「プロレタリアート独裁の革命的過渡期」を乗り切ることが当為です。<sup>38</sup>

すなわち、「プロレタリア革命」では政治革命をまず成就して、新しい下部構造を形成しなければならない。そこで不可避となるのが「プロレタリアート独裁の革命的過渡期」である。革命的過渡期を乗り越えることによって、下部構造が再編される。これが社会革命であり、旧勢力は物質的基盤を失い、新体制に内在化するという。こうして独裁が不要になり、無階級社会が到来するのである。次節では、こうした「プロレタリアート独裁」という概念についてより詳しくみていく。

#### 4. 過渡期としてのプロレタリア独裁

マルクスは、資本主義社会から共産主義社会への転換において、プロレタリアートの独裁がその役割を担うと述べる。廣松によれば、マルクスもエンゲルスもプロレタリアート独裁そのものを明確に定義しているわけではない。

資本主義社会と共産主義社会のあいだには、前者から後者への革命的な転化の時期がある。この時期に照応してまた政治的な過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない。<sup>39</sup>

このように、マルクスがプロレタリアート独裁を自明のもののように書いているため、

<sup>38</sup> 廣松渉『今こそマルクスを読み返す』（講談社現代新書、1990年）、265～266頁。

<sup>39</sup> マルクス『ゴータ綱領批判』（望月清司訳 岩波文庫、1975年）、53頁。

解釈が分かれうると廣松は述べる。なるほど、プロレタリア独裁とは誤解を招きかねない表現ではある。概念規定が曖昧であることを廣松はまず確認し、その由来を探っている。

廣松は上のようなマルクスの規定を踏まえて、「独裁」とはディクタトゥールの訳語にあたるが、国家権力の階級的本質そのものを表すものではなく、権力執行の在り方と密着した具体的な概念であると述べる。<sup>40</sup> そして、ディクタトゥールという言葉とはそもそも古代ローマのディクタトゥーラ、さかのぼってはディクタトルに由来しているという。<sup>41</sup> そこには、「独裁」という日本語から一般に連想されるニュアンスとは異なる含意がある。

いかなる民主主義的共和制—日本みたいに天皇がいたり、イギリスみたいにクイーンがいたりしたら知りませんけれども—、完全な共和制みたいなどころであっても、政治権力の性格としてはブルジョワ階級の独裁なのであり、それと同じように、プロレタリアートが権力を握った場合には、権力規定としてプロレタリア独裁と言うのであって、政治形態としては大いに民主的でありうる、とされます。その場合、独裁というのは、日本語の「独」とか「裁」とかから連想されるようなニュアンスはあまりないように言われます。ディクタトゥーラという言葉は、しかし、ローマ時代にどうだったかは知りませんが、少なくとも四八年革命の前後に、マルクスがたとえば『新ライン新聞』あたりに書いている評論のなかでのディクタトゥールという言葉の使い方にしても、当時のフランス人などの用語にしても、やはりジャコバン独裁とかいうようなイメージであって、個人がどうかは別としてきわめて少数者の、言ってみれば超法規的な強力な支配というようなニュアンスは、当時も免れていなかったと思います。マルクスはワイデマイヤー宛の手紙で、資本主義から共産主義—マルクスには社会主義社会ということばはありませんから—への過渡期はプロレタリア独裁でなければならないだろうと言って、そのことの必然性を認めたのは自分の功績と言っております。<sup>42</sup>

とはいえ、マルクスがディクタトゥールという言葉を使うさいも、少数者の支配という

---

<sup>40</sup> 廣松渉「マルクス主義と「プロ独」の問題」『朝日ジャーナル』（朝日出版社、1976年6月4日号）、18頁。

<sup>41</sup> *dictator* の辞書的な意味は、1. 口授者。2. 独裁官（非常時に任命された任期6ヶ月の臨時執政官）。となっている。水谷智洋編『改訂版 羅和辞典』（研究社、2011年）、198頁。

<sup>42</sup> 廣松渉『マルクスと歴史の現実』（平凡社、1990年）、92～93頁。

ニュアンスを免れていないという。そこでマルクスは、資本主義から共産主義への過渡期はプロレタリア独裁でなければならないと断じるのである。つまり、プロレタリア独裁とはプロレタリアが権力を掌握した場合の権力規定をいうのであって、民主的な政治形態と相反するものではないと廣松は解釈する。したがって、少数者の支配を超えるものとしてプロレタリア独裁を捉えるマルクスの規定に廣松は沿っているといえる。

ところで、廣松がプロレタリア独裁について主題的に論じたのは1976年が最初だが、その背景には、日本共産党が「プロレタリア独裁」を党の綱領から削除したという経緯があった。<sup>43</sup>

われわれとしては、それゆえ、昨今、イタリア、フランス、日本という先進資本主義諸国の共産党が一斉に「プロレタリア独裁」を党の綱領から削除する動きを見せている状況を前にして、マルクス主義とプロレタリアート独裁論の問題性を再確認しつつ、展望の一端にまで触れておきたいと思う。<sup>44</sup>

この論文で廣松は、それより2ヶ月前に日本共産党機関紙『赤旗』に掲載された不破哲三の論文「科学的社会主義と執権問題—マルクス、エンゲルス研究—」を取り上げている。その中の「実際、全集で41巻45冊にもものぼるマルクスとエンゲルスの著作、論文、手紙、ノートの全体に目を通すなら、この二人が、社会主義革命と社会主義建設の時期の国家権力についての自分たちの見解を、「プロレタリアート執権」の用語を使って説明したケースが、一般に予想されている以上に少ないことに気づく。」<sup>45</sup> という文章について、「当の事実は、研究者のあいだではもともと常識に属する事柄である」と批判している。

---

<sup>43</sup> なお、アルチュセールは「マルクス主義とヒューマニズム」(1963年10月)において、プロレタリア独裁の失敗例としてソ連邦を挙げている。「それ〔拒否〕はまたなによりもまず国内に、つまり、ソ連邦自体にむけられている。人格の社会主義ヒューマニズムの立場から、自分自身のためにソ連邦はプロレタリア独裁の時代をのりこえたことを公に認め、それだけでなく、プロレタリア独裁のおかした「過ち」、プロレタリア独裁が「個人崇拜」の時期にとった常軌を逸した「犯罪的」形式を拒否し、非難するのである。」ルイ・アルチュセール『マルクスのために』(河野健二・田村徹・西川長夫訳、平凡社ライブラリー、1994年)、422～423頁、傍点ママ。

<sup>44</sup> 廣松渉「マルクス主義と「プロ独」の問題」『朝日ジャーナル』(朝日出版社、1976年6月4日号)、17頁。

<sup>45</sup> 不破哲三「科学的社会主義と執権問題—マルクス、エンゲルス研究—3」『赤旗』(日本共産党中央委員会)、1976年4月29日付。

これに対して不破哲三は次のように、マルクスがプロレタリアート執権論をブランキ主義の影響のもとに作り上げたとする廣松の解釈を、逆立ちした歴史解釈だと反批判を行っている。

だが、広松氏が、このブランキ=マルクス論で、ブランキをマルクスのプロレタリアート執権論の理論的先行者として押しだしながら、ブランキが、マルクス、エンゲルス以前に、プロレタリアート執権についてのべた文章を、ただの一例も、引用していないのは、たいへん特徴的です。この一事にもみられるように、広松氏の主張は、もっぱら主観的推論でくみたてられたもので、歴史的事実にてらせばただちに崩壊する、虚構の論理といってよいでしょう。<sup>46</sup>

また、不破哲三の反批判を支持する形で、党中央委幹部会員である榊利夫は、『赤旗』上で4回に渡って掲載された「執権論とブランキ的虚妄 広松渉氏（『朝日ジャーナル』）の一文に対して」で廣松のプロ独論を批判している。榊によれば、マルクス=エンゲルスのプロレタリアート執権論は「ブランキ派の用語法が媒介になったものと思われる」という廣松の推量が誤りで、廣松は少数者革命論や少数専制的ディクタトゥーラ論に陥っているという。<sup>47</sup>

翌1976年8月、榊は日本共産党中央委員会理論政治誌『前衛』の討論で次のようにさらに執拗に批判している。

もう一つ、先ほども述べた『朝日ジャーナル』（6月4日号）の広松渉氏の論文があります。広松氏は、マルクス、エンゲルスのプロレタリアートの<sup>マ</sup>ディクタトゥーラ論は「ブランキ派の用語法、さかのぼっては、バブーフ主義者の用語法が媒介になった」などといって、いかにもブランキがプロレタリア執権論の理論的先行者であるかのようになっています。しかし、広松氏はブランキがマルクス、エンゲルスよりも前に、

---

<sup>46</sup> 不破哲三「多数者のための多数者革命—自由と国民主権の旗（下）—」『文化評論』（新日本出版社、1976年8月）、18～19頁。

<sup>47</sup> 榊利夫「執権論とブランキ的虚妄 広松渉氏（『朝日ジャーナル』）の一文に対して」『赤旗』（日本共産党中央委員会）、1976年6月23日～27日付。

プロレタリア執権についてのべた文章を、一例も引いていません、これでは証明になりません。

ブランキ派は、むしろ 1870 年～71 年のパリ・コミューン以後の時期に、マルクスやエンゲルスから借用して「プロレタリア執権」をいい出したのであり、しかも、かれらにあってはマルクスやエンゲルスがプロレタリア執権にもたせた民衆的で広範な概念を、少数者革命的にねじ曲げたのでした。歴史は、広松氏のいうこととはまったく逆であることをしめています。<sup>48</sup>

これらの批判に対しては、1976 年 9 月に『情況』編集部によるインタビューが組まれており、廣松は「全人民を武装させたというようなところにアクセントをおくとか、いつでも代表を解任できるとか、大衆と権力との関係に即してマルクス・エンゲルスは評価したわけでした、そういう内容をはなれて形式的な面で認定しようとするのは筋違い」であるとして、少数者革命論に陥っているという批判をしりぞけている。ブランキとの関係についても、次のように答えている。

これもよく読んでみれば、プロ独という思想そのものに関して、どちらが先に言い始めたかという議論にはなっていないでしょう。この時点でのブランキ派には、マルクスの側からの影響が現われていることは確かだと思います。御大ブランキ本人からして、後期になるとマルクス経済学の影響を受けているほどです。<sup>49</sup>

つまり、マルクスとブランキの影響関係は単純な一方的なものではなく、相互的なものであるという。また廣松は、マルクスとブランキとの交流といった郷土史的な研究も進んでいるとしている。

そもそも、廣松は共産党指導部からの批判の対象となった論文「マルクス主義と「プロ独」の問題」で、マルクスが「プロレタリアート独裁」という言葉を使う時機をうかがっていたことを挙げている。

---

<sup>48</sup> 田口富久治・榊利夫・井出洋・藤田勇「＜シンポジウム＞現代における変革の諸問題—その過程と内容を探る—」『赤旗』（日本共産党中央委員会理論政治誌、1976 年 8 月）、27～28 頁。

<sup>49</sup> 廣松渉「プロレタリア独裁論の歴史的基礎」『情況』（情況出版、1976 年 9 月）、20 頁。



マルクス・エンゲルスが「プロレタリアート独裁」という言葉を 1851 年から 1870 年までの期間（第一の“休用期”）に公的な文書で使用しなかったのは、この概念が世間では“極左”のブランキー主義と余りにも強く結びつけて理解されていたことへの配慮があつてのことであろう。<sup>50</sup>

このように、プロレタリアート独裁という概念はマルクス・エンゲルスの内にすでにありながらも、極左と見られたブランキー主義と同一視されるのを避けるために、自らの言葉として使うことを留保していたのである。そして、マルクスがプロレタリアート独裁の具体的な在り方、現実にあらわれた姿を発見したのが、1871 年のパリ・コミューンであった。この経緯を廣松は次のように述べている。

ところが、パリ・コミューンは、“バブーフ―ブランキー”流の少数者独裁とは異質の、「真に民主主義的な」プロレタリアート独裁を現示してみせた。マルクス・エンゲルスは、ここにおいて「ついに発見した」のであり、『ゴータ綱領批判』においても『エルフルト綱領批判』（1891 年）においても、プロレタリア独裁の思想そのものを曖昧にする日和見主義的な自派幹部に対して、ブルジョア国家のうちでは“最良”の「民主共和制」といえども、プロレタリアート独裁のための好便な一手段以上のものではないこと、いわんや官僚主導の立憲君主制でしかない現状においては平和革命の幻想を振りまいてはならないこと、この点を厳しく指摘しつつ、資本主義社会から共産主義社会への「革命的転化の時期における国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない」ことを論じて一歩も退かなかつたのである。<sup>51</sup>

このように、パリ・コミューンにマルクスのプロレタリア独裁論の現実形態があるとして、あらためてその有効性を説いたのは、次のように、廣松が理論家としてコミットした新左翼運動が担うべき「マルクス主義の第三段階」を推し進めるためであった。

---

<sup>50</sup> 廣松渉「マルクス主義と「プロ独」の問題」『朝日ジャーナル』（朝日出版社、1976 年 6 月 4 日）、19 頁、傍点ママ。

<sup>51</sup> 前掲書、19～20 頁。

新左翼は、もとより、レーニン教条主義を事とするものではないが、その本流は、レーニン主義の革命性を現代的諸条件のもとで発展的に継承しつつ、スターリン主義的独裁による革命の篡奪を防止するためにも、マルクスの説いた、かのコミューン型プロレタリア独裁の構想を継承・展開しつつ、その実現を実践的に追求してやまないであろう。

顧みれば、マルクス主義の運動は、かなりの以前から、レーニン主義の段階につづく第三段階の模索期を迎えている（前掲拙著を参照されたい）。だが、いずれにせよ、「プロレタリア独裁論」一本稿では立ち入る余裕を欠くが、マルクス・エンゲルスの原型がレーニン達によって、より具体的な形に“展開”されて今日に及んでいる一、これが「第三段階」においても、第二段階にけると同様、新旧両派の象徴的な分岐・対立点となるであろう。今や公然と賽が投ぜられたのである。<sup>52</sup>

共産党がマルクス・レーニン主義のプロレタリア独裁を放棄したのに対して、新左翼は、マルクスが1850年に定式化した「永続革命」の戦略に拠って、中間的政権を「プロレタリアート独裁」に転化させようとするだろうと廣松はみている。

## 5. 永続革命、世界革命へ

廣松がプロレタリア独裁を重視するのは、前衛による権力の過渡的掌握によって、ヘゲモニーを漸進的に左方へ移動させていくという戦略があったからである。そしてその先に構想されているのが、永続革命である。永続革命とは、マルクスとエンゲルスが、「1850年3月の「共産主義者同盟」中央委員会への呼びかけ」、通称『回状』で述べた思想である。『回状』によれば、民主主義的小ブルジョアは、プロレタリアのために全社会を変革するつもりはなく、できるだけすみやかに革命を終わらせようとしているという。そしてそこでプロレタリアが取るべき途が次のように示される。

われわれの利益とわれわれの任務は、多少とも財産を所有するすべての階級が支配的

---

<sup>52</sup> 廣松渉「マルクス主義と「プロ独」の問題」『朝日ジャーナル』（朝日出版社、1976年6月4日）、22頁。

地位から追いのけられ、プロレタリアートが国家権力を掌握し、一国だけでなく全世界のすべての主要国のプロレタリアの結合がいちじるしくすすんで、その結果、これらの国々でプロレタリアどうしの競争がやみ、すくなくとも決定的な生産力がプロレタリアの手に集中されるまで、革命を永続させることである。われわれにとって必要なのは、私的所有を変更することではなくてまさにそれを廃絶することであり、階級対立をごまかすことではなくて階級を廃止することであり、現存の社会を改善することではなくて新しい社会を建設することである。<sup>53</sup>

ここでマルクス・エンゲルスは、小ブルジョアの民主党が影響力をもつ状況下で、プロレタリアートがどのような態度をとるべきかを問題視する。そこで呼びかける戦略、手段とは次のようなものであった。

労働者は、新しい公式の諸政府と並行して、市町村参事会や市町村議会の形であれ、労働者クラブまたは労働者委員会をつうじてであれ、独自の革命的な労働者諸政府をうちたて、こうして、ブルジョア民主主義的諸政府からただちに労働者の支持を奪いさるだけではなく、労働者の全大衆をうしろにひかえた権力機関によってはじめから監視され威嚇されているのだということを、これらの政府に理解させなければならない。<sup>54</sup>

すなわちそれは、中央政府にたいする臨時政府という形で二重権力を樹立し、下から突き上げながら圧力をかけるという戦略である。ここで臨時政府を確立するのは、当初は比較的少数の自覚的な前衛であり、大衆が広く新たな支配者になるまで独裁的体制を担う。「プロレタリア独裁」という用語をこの時点ではまだ使っていないが、事実上同じものを含意している。こうした「プロレタリアートの独裁的過渡期」を乗り切ることが、永続革命の要件となる。そして、『回状』は次のように永続革命を呼びかけ、締めくくられる。

---

<sup>53</sup> マルクス・エンゲルス『マルクス＝エンゲルス全集 第7巻』（大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、1961年）、252～253頁、傍点引用者。

<sup>54</sup> マルクス・エンゲルス前掲書、255頁。

しかし、労働者が最後の勝利を得るためには、彼ら自身がいちばんに努力しなければならない。すなわち、自分の階級利益を明らかに理解し、できるだけはやく独自の党的立場を占め、一瞬間といえども民主主義的小ブルジョアの偽善的な空文句にまよわされずに、プロレタリアートの党の独立の組織化をすすめなければならない。彼らの戦いの闘いの声はこうでなければならない—永続革命、と。<sup>55</sup>

マルクス・エンゲルスは、革命という言葉で武装蜂起のようなものを拙速に持ち出しているわけではない。労働者がまずかかわるものとして挙げられているのは、市町村参事会、市町村議会、労働者クラブ、労働者委員会といった目前にある小さな集合体である。それらをつうじて労働者諸政府をたて、革命を永続させていく。そして、その先には、一国だけでなく、全世界のプロレタリアの連帯がある。新しい社会の建設を説いているが、手の届かないおおきな理想を掲げているわけではない。廣松はこうした永続革命を「共産主義革命の構想」のうち、未来社会像というより、それを実現するプロセス、手段に関わる議論<sup>56</sup> であるという。

つまり、比較的少数の自覚的・指導的分子が独裁的体制を取るのは、少数革命論を目指しているわけではなく、永続革命のひとつのステップとするためなのである。こうしたマルクスのプロレタリア独裁論および永続革命論を、廣松はソ連共産党崩壊後の現代世界にも援用している。

党組織のありかたというのは、一気に権力を握る戦略の場合と、永続革命の戦略の場合とでは、違いがありうる。今の先進国での革命は、マルクスの構想やロシア革命の進展とは異なった形態をとるにしても、永続革命的進展という様相は共通しているのではないか。永続の様相を計算に入れて前衛党組織論を構築する必要があると思うのです。そのうえ、これは先にもちょっと申したことですが、権力を奪取したあと、国家の死滅を具体的に推進して行くための党のありかた、これも事前に定式化され了解事項になっていなければならない。[中略] 私どもとしても、ブランキや一時期のマルクスそのままではないにせよ、現代世界における永続革命の路線、

---

<sup>55</sup> マルクス・エンゲルス前掲書、259 頁。

<sup>56</sup> 廣松渉『マルクスと歴史の現実』（平凡社、1990 年）、75 頁。

しかも大衆叛乱型の革命に見合った前衛党組織論を具体的に構築することが課題だと思います。<sup>57</sup>

このように現代世界における前衛党組織論をあらためて考案しなければならないとするのに加え、南北格差・生態系の破壊といった危機が弥縫できなくなった現代では、資本主義の矛盾を一国で解決することは不可能だと廣松はいう。ここではマルクスが述べた意味とは別の水準で世界革命が問題となっている。

後進国の反乱からストレートに世界革命になるなら話は別ですけれども、何といても先進国の革命が鍵になる。宗教というほどのレベルに行けば、「べき」の話であり理念の話ですから、先進国側で一国主義的ではなく世界的にものをみて、先進国の生活のレベルを一時下げてでもというほどの理念がコンセンサスにならなければならない。

58

マルクスが掲げ、1970年代に廣松もそれに則っていたような、下から突き上げる形での「プロレタリアート独裁」を乗り切るという戦略だけではなく、現代では先進国における革命も一国ではなく世界的なものでなければならない。そして、未来共産主義社会においては、道徳的・倫理的な規範に人々が随順することによって秩序が保たれるという。そのさい軸になるのは、マルクス主義の第三段階であると繰り返し廣松は述べる。

新社会主義なり新共産主義なりということになるかも知れないですけれども、歴史のダイナミズムではルネッサンスとか、原点に戻るとか、なんとかの正統な継承であるとか言うような形でしか現実な結集軸ができにくいということもまた確かだと思うので、ぼくから言いますと、やはりマルクス主義というのがその旗幟になると思うのです。マルクスの思想が資本主義批判としては非常に原理的に決っていることは多くの人が認めるところだし、世界観的にも新しいパラダイムを拓いており、巨大思想とし

<sup>57</sup> 山川暁夫・廣松渉「ソ連共産党崩壊後の前衛党論（下）」『情況』（情況出版、1992年5月）、98頁。

<sup>58</sup> 和田春樹・廣松渉「ロシア革命以降の世界とマルクス主義—国家社会主義の終焉」『情況』（情況出版、1993年8・9月）、31頁。

ての権威と膨大な信奉者をすでに持っている。ユートピアとしては貧弱だと言われるし、過渡期についても具体的なプランが描かれていないことが指摘されるし、過渡期をどう終らせるかのかの方策も不明確だと言われますけれども、そこを具体的かつアクチュアルに埋めたもの、それがネオ・マルキシズム—僕としては第三段階ということばを使っていますが—の中身になるのではないのでしょうか。あるいはなつて欲しいと願望しています。<sup>59</sup>

廣松は、マルクス主義がユートピアとしては貧弱であり、過渡期の具体的なプランもないという指摘に対して、肯定的な理想社会を対置して答えているわけではない。しかし、それでもなお、新たなマルクス主義を固守するのである。

このような廣松の構想は、理論的主著である『存在と意味 第二巻』（1993年）の末尾でも抽象的に述べられている。

本節の行文を通じて闡らかな通り、著者としては、人倫的諸価値のうち「正義」を以って最高位に据える。〔中略〕このさい、謂う所の「達成可能性」なるものは、「通用的」判断においては屢々“達成不可能”“夢想的な高望み”とされがちである。それゆえ、それが「達成可能」であること、「達成可能な高い価値」であること、このことを現示し、以って、その達成が「正義的行為」であることを証示するためにも、実践的・現実的にそれを達成してみせることが要件となること往々である。一本節ではたかだか「正義」の形式的規定とその妥当条件の形式的構図を陳べたに留まり、最高価値の内実とその実質的完現を呈示・描出するには至っていない。これを図るには、「文化的世界の存在構造」の討究（第三巻）を通じて価値体系を整序する作業を要するが、次篇における「制度的世界」の検覈はその一前提となる筈である。<sup>60</sup>

内実の呈示を先送りにした形で性急に打ち出された「正義」という価値原理は、マルクスが生きていた時代とは全く異なる様相を帯びた現代において、世界中のあらゆる場所からの構造変動を促すために、廣松が理論的次元でつむぎ出したものであるように思われる。

---

<sup>59</sup> 前掲書、33頁。

<sup>60</sup> 廣松渉『存在と意味 第二巻』（岩波書店、1993年）、484頁。

## おわりに

これまでソ連崩壊後の廣松の言説を辿ってきたが、社会的な情勢の激変を受けてそれまでの自説を曲げた跡は見当たらず、1990年代の主張も、理論的な道具立ては1970年代のものとそう大きくは変わらない。むしろ、ソ連崩壊を機に、あためていたマルクス論を開陳したという方が適切であるようにも思われる。廣松は、一国ではなく世界的な連関の中での革命を唱えていた。そして、世界革命が真に達成された暁には、「国家のない社会」「国家なき世界統一社会」が生まれ、そのとき国家は眠り込むように、消滅するという。

1970年代に廣松は、新左翼運動の戦略として、マルクスのプロレタリア独裁、永続革命、世界革命といった概念を用いていた。1990年代には、それらの概念を再び用いながら、時勢に応じる形で彫琢し援用している。しかしながら、「真にマルクス主義的な世界革命」、マルクス主義の第三段階、そして晩年に打ち出した最高位にある「正義」といった抽象的な原理は、内実のないままになっている憾みがある。それまでの廣松の思想は、プロレタリア独裁や永続革命の理論で見たとおり、下から（内から）漸進的に革命を進めるものであった。それは、大仰な理想社会の実現を拙速に迫るものというよりも、目の前の具体的な歩みをすすめるものである。それゆえ、最高位の価値としての「正義」といったいわば上から（外から）の原理は唐突な印象をぬぐえない。

廣松の早すぎる死により未完に終わった主著『存在と意味』とマルクス解釈とをつなぎとめるものを、廣松の内部に探っていく試みが今後にも必要になるだろう。